



日本植物分類学会 ニュースレター

No. 62

Aug. 2016

今号のトピックス

日本植物学会第 80 回大会におけるシンポジウムのご案内があります。

2016 年度の講演会は 12 月 17 日（土）です。

学会賞および奨励賞の候補者を募集しています。

目 次

会長および評議員選挙の結果	2
評議員追加選出の結果について	2
諸報告	
2016 年度野外研修会（新潟県佐渡島）報告	2
日本植物分類学会の財政基盤の健全化にむけて（2）	5
お知らせ	
日本植物学会第 80 回大会におけるシンポジウムのお知らせ	6
2016 年度日本植物分類学会講演会のお知らせ	7
第 16 回（2017 年度）日本植物分類学会賞（学会賞および奨励賞）の 受賞候補者の募集	7
日本植物分類学会第 16 回大会（京都）ホームページ開設のお知らせ	8
書評	
日本産花粉図鑑 増補・第 2 版	9
森を食べる植物 腐生植物の知られざる世界	9
新版 形とくらしの雑草図鑑	10
植物研究会・同好会紹介	
愛媛植物研究会	10
会員消息	12

会長および評議員選挙の結果

選挙管理委員長 牧 雅之

日本植物分類学会ニュースレター No. 61 で公示された日本植物分類学会会長および評議員選挙の開票結果についてお知らせします。

開票は2016年7月29日(金)に東北大学植物園(仙台市)において、本学会会員の木村拓真氏、堀江佐知子氏の立ち会いのもとで行われました。開票の結果、以下の方々が次期会長および評議員に決まりました。

【会長】

当選	伊藤 元己	56 票
次点	村上 哲明	43 票

(有効投票数 150 票)

【評議員】

当選	海老原 淳	42 票
	黒沢 高秀	40 票
	志賀 隆	32 票
	岡崎 純子	32 票
	米倉 浩司	31 票
	藤井 伸二	30 票
	西田 佐知子	28 票
	布施 静香	22 票
次点	副島 顕子	21 票

(有効投票数 139 票)

評議員追加選出の結果について

評議員 海老原 淳

選挙管理委員長からの報告の通り、次期評議員として8名が選出されました。「役員等の選出についての細則」第4条の規定に基づき、8名の合議によって下記の4名を評議員として追加選出しました。

副島 顕子, 土金 勇樹, 坪田 博美, 村上 哲明 (五十音順)

諸報告

2016年度野外研修会(新潟県佐渡島)報告

上赤 博文

2016年度の野外研修会は5月20～22日に2泊3日の日程で新潟県佐渡島にて行われた。

5月20日(金)

13時に佐渡市両津港現地集合である。フェリーを降りると見覚えがある面々に気がつく。いよいよ日本最大の島での研修会の始まりである。今回の野外研修会のお世話をいただいている新潟大学農学部フィールド科学教育研究センター佐渡ステーションの公用車4台に分乗し出発した。

最初の目的地はドンデン山である。花を目的とした観光ツアーでは必ず組み込まれていると聞いたので、整備された観光地かと思っていたら、マイクロバスまでしか通れない道で駐車場も狭く、俗化されていないことにひとまず安心。駐車場からすぐに遊歩道に入る。最初に出迎えてくれたのはオオタチツボスミレとズダヤクシュ。低木林の中を進む遊歩道沿いには、ブナ、オオバクロモジ、エゾズリハ、オオカメノキ、タニウツギ、ハウチワカエデ、ウラジロヨウラク、チゴユリ、フッキソウ、ヤマトグサ、カタクリ、ヤマシャクヤクなどが生育している。九州出身の筆者には学会の現地研修会の時にしか出会えない植物が大半を占める。このルートの最高峰である尻立山(940m)を過ぎるとドンデン高原が広がる。一帯は牛の放牧により広範囲にシバ草が広がっていたらしいが、最盛期の4000頭から現在では20頭まで減少し、草地は縮小しているらしい。それでも尾根部はいい感じの草原が広がっていた。植物相にも変化がみられる。草原にはオオイワカガミ、エゾタンポポ、レンゲツツジなどが咲き乱れていた。キジムシロの仲間があったが、この辺のものはエチゴキジムシロでいいでしょうという説明と、分ける必要はないとする考えがあった。植物論議に花が咲いていた。少し下ったところにヒロハヘビノボラスの群落があった。放牧により選択的に残った忌避植物である。ちょうど花の時期でカメラマンに取り囲まれていた。がれき場を下ったあたりは林道につながっている。道の両側は状態のよい夏緑樹林で、林床や湿地にはエンレイソウ、シラネアオイ、ズダヤクシュ、ニリンソウ、サンカヨウ、ヒトリシズカ、ヤマトリカブト、ヤグルマソウ、ウワバミソウ、ミズバショウ、ザゼンソウなどが生育していた。5月中旬は例年だったらシラネアオイの最盛期でカタクリも残っているらしいが、今年は積雪が少なかったため季節が2週間ほど早く進んでいるとの説明があった。かろうじて最後のシラネアオイを見ることができた。

研修会の宿舎になっている新潟大学農学部の佐渡ステーションは、ドンデン高原から北に進み時計回りに移動すれば30分ほどで着く場所にあるが、途中が工事で通行できないらしく、反時計回りに移動したために1時間半を要した。しかし、そのおかげで海岸風景を堪能することができ、3日目に訪問予定の大野亀ではトビシマカンゾウが例年より早く咲き始めているのを遠目に確認することができた。

夕食は歓迎の郷土料理が並んだ。おさしみ、にしめ、いねごり、とちもちなど素朴であるが、心のこもった食事であった。

佐渡の地形区分と植生について、崎尾均教授のご講演が夕食後であった。佐渡島の気候は夏の低温と冬の多雪に特徴づけられ、冬季の強い季節風も特徴的である。佐渡島は北の大佐渡と南の小佐渡から成り、その間に国中平野がある。大佐渡は最高峰が1,172mで900m付近に森林限界があり、植生は多様である。小佐渡は最高峰が600m台でコナラの二次林が広く分布する。大佐渡の東海岸と小佐渡の海岸には150m以下に照葉樹林がある。対馬海流(暖流)の影響で海岸の雪は少ないらしい。大佐渡の中腹にはブナやミズナラなどの冷温帯落葉樹林が、尾根沿いの高標高地にスギ天然林が分布している。ただし、垂直分布は不明瞭でハクサンシャクナゲが海岸まででるかと思えばハマナスが山に見られたりする。ヤマオダマキやサンカヨウ、オオサクラソウなどの植物が大佐渡だけに分布するのに対し、ユキツバキは小佐渡だけに分布している。ヤマトグサは佐渡では普通に生育が見られるが、新潟本土や近県には分布が知られていないのも特徴的である。

なお、動物についてはニホンジカやツキノワグマのような大型哺乳類は生息せず、最も大きいのはノウサギなので安心してトレッキングができる、草食動物の食害がなく林床植生が豊かであるという話もされていた。ただし、昼間観察をしたドンデン山などでは放牧の歴史があり、フクジュソウ、カタクリ、ミズバショウ、キクザキイチゲ、オオサクラソウ、ヤマシャクヤクなどは忌避植物であると紹介された。

5月21日(土)

2日目は、新潟大学佐渡演習林での実習である。まず、林道谷口～黒姫線から大学のゲートに入る。ほどなく、車を停めて散策。時間は15分ということで100mあまりを見て回る。林道沿いでハナイカダ、オオバクロモジ、エゾイラクサ、ウワバミソウ、オオハナウド、フタリシズカ、谷筋でコチャルメルソウ、サ

ワハコベ、コケイランなどを見て車に戻ると、後方で騒いでいる声がある。行ってみるとサルメンエビネが開花していた。筆者には初見であった。

車でさらに上を目指し、尾根線沿いと思われる林道を進む。道の両側にヤマオダマキが点々とある。ここでは普通種なのか、やはりすごいところに来ていると心の中で感心していた。2つ目の目的地は「大倉シラバ」という半自然草原。ここも数年前まで牛の放牧が行われていた場所。登山口から沢沿いを歩く。途中やはりヤマオダマキが多い。他にはクサボタン、キリンソウ、オオイタドリ、ヤマブキシヨウマなど。約30分で目的地到着。草原にはレンゲツツジ、エゾタンポポ、ヒメスイバ、ヒロハヘビノボラスなど、やはり忌避植物が目立つ。レンゲツツジの下に最初は園芸植物のセイヨウキランソウではないかと話していたシソ科植物が群生していた。しかし、近隣の研究者の話からケブカツルカコソウであることが分かった。車に戻り、午後からの観察ポイントに移動して早めの昼食をとる。

昼食をとった林道沿いはシラネアオイ、ザゼンソウが競うように咲いていた。キクザキイチゲも最後の花を我々の前に思いっきり広げていた。ここからは本日最も長いトレッキングである。しかも自然度が高い森林の中を歩く。アケボノシュスラン、コショウノキ、コブシ、ミヤマカタバミ、オニシモツケ、シナノキなどはこのルートで初めて出現したように記憶している。歓声が上がったのはカタクリの花に遭遇した時だ。終わった花や果実は随所で見したが、ルートの方で見事な花を見つけた時は感慨深いものがあった。北日本では珍しいものではなく、しかもかなりの群生地が各県に知られている。今回は期待できないと半ば諦めていた花が見られ、疲れが吹き飛んだ瞬間であった。



学会シンボルマークのシラネアオイが至るところに（撮影：著者）

ほどなく林道に出て、公用車で宿舎に戻る。標本作りを終えたあとは、佐渡ステーションで不定期に行われている「佐渡ゼミ」に参加した。

今回の佐渡ゼミは、西野貴子さんが講師で「蛇紋岩植物への華麗なる転身!? ～サワシロギクの湿地からの挑戦～」について話を伺った。西野さんは蛇紋岩植物を材料に種分化がどうやって起こるかを研究されている。全国の低～中間湿地に生育しているサワシロギクと静岡県の大井川のみ知られているシブカワシロギクは近縁な関係にあるが、地下茎の有無や花時の根生葉の有無に違いがあり、種子の大きさや発芽率の違いなど生活戦略が異なり、生態型として分化している。近辺の蛇紋岩地帯には、どちらともつかない中間的な形態で蛇紋岩耐性の弱い集団も存在し、適応による種分化の途上を目の当たりにできると話されていた。

夕食はバーベキュー。さすがに日本海の島である。魚やイカはもちろん、まだ動いているサザエ、アワビがテーブルに並んだ。崎尾先生からサザエを殻から引き出して生で食べる方法が伝授された。さっそく皆さんチャレンジしている。肉や野菜も大量に準備されていて、地元のお酒を飲みながら、楽しいひと時を過ごすことができた。

5月22日（日）

最終日は大野亀と二つ亀遊歩道で海岸植物を観察した。大野亀はトビシマカンソウの群生地として観光パンフレットの表紙を飾る景勝地である。ちょうどカンソウが咲き始めていて晴天をバックに絵はがき様の風景を堪能できた。ここは15分で切り上げて、二つ亀遊歩道の海岸植物をゆっくり観察した。帰りのフェリー時間があるので、両津港に12時までには到着する必要がある。時間を気にしながらも十分な観察をすることができた。ハマヒルガオ、ハマナス、エゾオオバコ、ハマエンドウ、ハマハタザオ、ハマボス、タイトゴメなど九州でも定番の種類が多い。珍しかったのはスカシユリ、エゾヒナノウスツボ、エチゴトラノオ、ウミミドリである。終点は願集落で最後に長い階段状の遊歩道を登る。植生に変化が見られ、イブキジャコウソウ、アサツキ、アズマギク、ジャケツイバラ、ホタルカズラなどがここだけに出現した。

これで研修を終えたが、3日間とも天気に恵まれ、ここは本当に日本海だろうかと思うくらい海は静か

であった。山が深く、谷が深く、水が豊富で、やはり大きな島なのだと実感した。本土に比べると草食動物の食害がない多様な自然に触れることができ、観察した植物を挙げてみると、これほど多くの植物を見たのだと改めて佐渡の自然の豊かさに感心した。しかも、今回観察したのは面積的には佐渡の1/4程度であり、わずか3日間である。島全体を年間通して観察したらどれだけ多様な植物が見られるのだろうと考えたところである。今回、このような密度の濃い研修ができたのも、新潟大学農学部崎尾均教授、阿部晴恵先生、菅尚子先生、さらに公用車を運転していただいたスタッフの方々のおかげである。改めて感謝申し上げる次第である。



参加者一同と、ご案内いただいた阿部先生、菅先生
(撮影：西野貴子)

今年度の野外研修会はニュースレターでのご案内から3週間ほどで当初の定員に達し、新潟大学農学部フィールド科学教育研究センター佐渡ステーションに増員のご無理をお聞き入れていただいたのですが、残念ながらそれでもかなりのお申し込みをお断りすることになり、申し訳ございませんでした。どうぞ来年度の研修会もご期待ください。

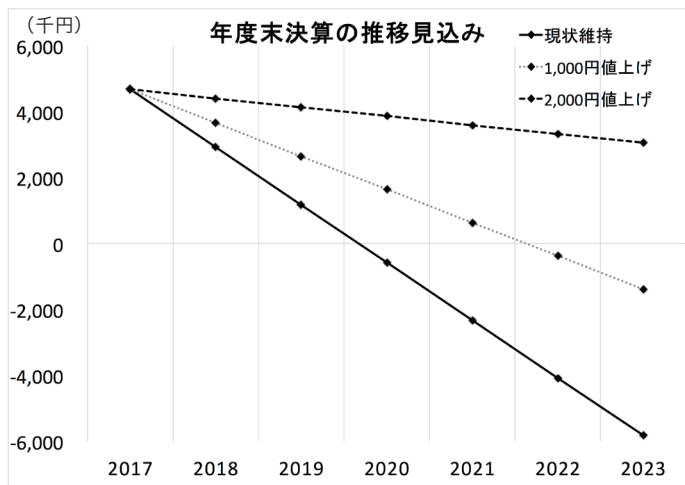
また、野外研修会の開催場所の情報も随時お寄せください。行きたいところでも、ご案内したいところでもどちらでも結構です。開催には採集や宿泊等の諸条件があるためご希望にそえられない場合もありますが、半世紀余り続く野外研修会を一層充実したものとするようご協力をお願い申し上げます。(野外研修担当委員 西野貴子)

日本植物分類学会の財政基盤の健全化に向けて (2)

会長 角野 康郎

先のニュースレターで会費の値上げについて検討していることをお知らせしました。今回は、より具体的に、今後の見通しについて考えてみます。

右図をご覧ください。これは現在の会員数を前提とした上で、会費を値上げしなかった場合と年会費を値上げした場合の決算額の推移についてシミュレーションした結果を示しています。現在の会費のままでは2019年度には赤字に転落し、会の活動を維持してゆくことができなくなります。では値上げするとした場合、1,000円では破綻が少し先延ばしできるだけで財政の健全化にはほど遠いこともわかります。現在のサービスを維持していくためには、少なくとも2,000円の値上げが必要であること



がわかります。つまり一般会員の会費を7,000円（学生会費は据え置き）にすることで持続的な運営が可能になります。

問題は、この会費を高いと考えるかどうかです。そこで、関連学会の会費と比較してみましょう（2016年8月現在）。

- ・日本植物学会 一般 12,000円 学生 2,000円：英文誌6冊
- ・植物地理・分類学会 一般 4,000円 学生 1,000円：会誌2冊
- ・種生物学会 一般 12,000円 学生 6,000円：英文誌3冊（オンライン）、和文誌1冊
- ・日本動物分類学会 一般 7,000円 学生 5,000円：英文誌2冊、和文誌2冊

また、学会ではありませんが、植物研究雑誌（年6冊）の年間購読料は8,000円＋消費税となっています。多くの都道府県にある植物研究会等の年会費は3,000～4,000円が大半です。

これらの会費は、会誌等の発行回数や会員数によって決まってきます。会費は安いに越したことはありませんが、サービスを維持できる収入を確保できるように年会費を設定しなければ、学会そのものが成り立ちません。その意味でも、植物分類学会の現在のサービス（英文誌3冊、和文誌2冊）を持続的に維持していくためには、年会費7,000円は不合理な額ではありません。また、他学会と比較しても、特に高額という訳ではありません。しかし、負担が大きすぎると感じられる方もおられることは十分に承知しており、落としどころをどこにするか、経費削減の努力とともに検討しているところです。

そこに植物分類学関連学会の再編の可能性という新たな状況が出てきています。植物地理・分類学会の本年6月の総会において「日本植物分類学会との合流も視野に入れて課題を検討していく」という方針が承認されました。現時点では正式の申し入れはなく、申し入れがあってもそれに対応するかは次期会長の意見も踏まえて検討することになります。そのために現時点で仮定に基づく話は最小限にとどめたいと思いますが、仮に「合流」となれば、現在、日本植物分類学会と植物地理・分類学会の双方に属しておられる会員の方の負担は軽減されます。また、今まで植物分類学会の会員でなかった植物地理・分類学会会員の方が新たに入会されると、少なからぬ会員増が予測されます。そうなると上記のシミュレーションも変わってくることになります。

このような流動的な要素もあるという状況を踏まえ、より具体的な方針を考えることとなります。新たな状況の展開については皆さんにお知らせしながら、来年3月の総会まで引き続き検討を続けてまいります。

お知らせ

日本植物学会第80回大会におけるシンポジウムのお知らせ

瀬戸口 浩彰（京都大学）・横田 昌嗣（琉球大学）

9月16日から19日までの日程で、沖縄コンベンションセンターにて日本植物学会第80回大会が開催されます。植物学会として初めて沖縄県で開催される大会です。これにあたり日本植物学会から要請を受けて、琉球列島の植物相形成に関するシンポジウムを企画しました。日本植物分類学会との共催となります。多くの方のご参加をお願い致します。

シンポジウム「琉球列島における植物の多様性と進化史の学術的再評価」(3aSE)

趣旨：第四紀気候変動のなかで、琉球列島は陸橋の形成と分断を繰り返して、そこに生育する植物の進化と多様性の形成に大きく作用した。また、気温の傾度や黒潮等の海流の影響などの要素も、植物の多様性形成に寄与していると思われる。本シンポジウムでは、琉球列島における植物の多様性と進化史について4名の演者に講演していただき、それらを総括して琉球列島の植物の学術的再評価を目的とする。

開催日：9月18日（日）9時30分から12時30分（大会3日目）

講演スケジュール

- 9:30- 9:40 横田 昌嗣（琉球大学）「はじめに」
9:40-10:10 中村 剛（北海道大学）「琉球列島の植物地理：陸橋、気候クライン、大陸間分散」
10:10-10:40 河野 淑子（高知県立大学）「琉球列島における植物の染色体多型と地理分布」
10:40-11:10 高山 浩司（ふじのくに地球環境史ミュージアム）「海を介した種子分散：琉球列島と小笠原諸島の比較から」
11:10-11:40 三井 裕樹（東京農業大学）「琉球列島の溪流環境で進化した植物。その起源と適応様式について」
11:40-12:00 問題提起
12:00-12:30 総合討論

2016 年度日本植物分類学会講演会のお知らせ

講演会担当委員 岡崎 純子

平成 28 年度の日本植物分類学会講演会は、大阪学院大学の林一彦先生にお世話いただき、次のおり開催いたします。演者には岩崎貴也さん、海老原淳さん、田村実さん、戸部博さん、林一彦さん、藤井伸二さんを予定しております。演者および内容の詳細につきましてはメーリングリストおよび次回のニュースレターでご案内いたします。是非ご参加ください。

日時：2016 年 12 月 17 日（土）午前 10 時～午後 5 時

講演会場：大阪学院大学・2号館地下1階2号教室（02-B1-02 教室）
〒564-8544 大阪府吹田市岸部南2丁目36番1号（電話：06-6381-8434）

会場までの行き方：JR 東海道本線岸辺駅、阪急京都線正雀駅から大阪学院大学までともに徒歩 5 分、詳しくは大学の HP（<http://www.osaka-gu.ac.jp/guide/campus/access.html>）から「交通アクセス」をご覧ください。

第 16 回（2017 年度）日本植物分類学会賞（学会賞および奨励賞）の受賞候補者の募集

日本植物分類学会会長 角野 康郎
学会賞選考委員会委員長 秋山 弘之

日本植物分類学会賞（学会賞および奨励賞）の受賞候補者を募集します。学会賞・奨励賞ともに、会員の皆様からの積極的な自薦による応募を期待します。他薦についても、ふるってご推薦いただければ幸いです。これまでの受賞者名等については学会ホームページでご覧いただけます。候補者は学会賞選考規定第 2 条に基づき、以下に該当する方です。

「日本植物分類学会賞」：植物分類学および日本植物分類学会の発展に特に顕著な貢献が認められた方に授与いたします。受賞者の資格は 10 年以上継続して本会会員である方です。

「日本植物分類学会奨励賞」：平成 29 年 4 月 1 日において満 38 歳以下で、優れた研究業績をあげた将来有望な若手研究者(学生を含む)に授与いたします。受賞者の資格は 3 年以上連続して本会会員であり、主要な研究業績の一部を本会の大会または雑誌に発表している方です。

応募要領：自薦の場合は、(1) どちらの賞への応募か、(2) ご自分の研究全体を示すタイトル、(3) 略歴(生年月日、学歴、職歴など)、(4) 調査・業績の概要、そして(5) 業績リスト(論文、著書など)と本学会の大会での発表記録を、MSWord や一太郎等の電子ファイル、あるいは A4 用紙に記入してお送りください。書式は自由です。他薦の場合は、(1) 候補者の氏名、(2) どちらの賞への応募か、(3) 研究全体を示すタイトル、(4) 略歴、(5) 推薦理由をお知らせください。

自薦、他薦を問わず、さらに必要な資料があれば学会賞選考委員会から候補者の方に提出を依頼します。応募は e-mail でのファイル添付または郵便でお願いします。

書類送付先：〒 669-1546 三田市弥生が丘 6 丁目 兵庫県立人と自然の博物館 秋山弘之
e-mail: akiyama アットマーク hitohaku.jp (カタカナを @ に変えてください)

応募締め切り日：平成 28 年 9 月 26 日(月)

両賞の受賞者は、平成 29 年 3 月の日本植物分類学会第 16 回大会(京都)において表彰されます。また、同大会において受賞講演を行っていただき、和文誌『分類』に受賞記念論文を発表していただくことを原則としております。

日本植物分類学会第 16 回大会(京都) ホームページ開設のお知らせ

第 16 回大会実行委員会 事務局長 布施 静香
同 ホームページ担当 坂口 翔太

日本植物分類学会第 16 回大会のホームページが開設されました。大会に関する情報を順次公開していきますので、ご覧いただけますよう宜しくお願い致します。

【URL】 <http://www.e-jsps.com/jsps16/top.html>

なお、先のニュースレターでもお知らせしましたが、宿泊に関しては各自でのご予約をお願い致します。春の京都は宿が取りにくい可能性がありますので、ご予約はお早めをお願いします。多数のご参加をお待ちしております。

【問合せ先】 〒 606-8502 京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院理学研究科植物学教室内
日本植物分類学会第 16 回大会実行委員会 事務局長 布施 静香
Tel & Fax: 075-753-4145 E-mail: jsps16@sys.bot.kyoto-u.ac.jp

植物研究会・同好会の記事を募集します

活発に活動されている研究会や同好会を紹介していきたいと思っております。
紹介したい、あるいはしてほしい研究会や同好会がございましたら、ぜひお知らせください！
ご連絡をおまちしています。

ニュースレター担当幹事 堤 千絵 (tsutsumi@kahaku.go.jp)

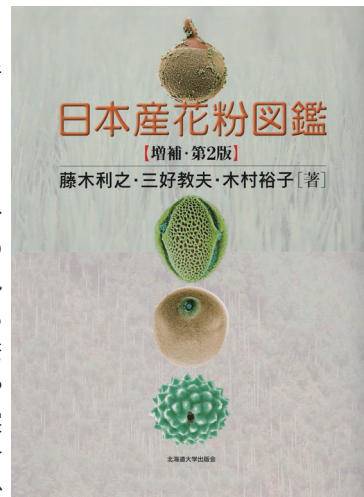
書評

日本産花粉図鑑 増補・第2版

藤木 利之・三好 教夫・木村 裕子 / 著 北海道大学出版会 / 発行
 ISBN : 978-4-8329-8222-2
 定価 : 19,440 円 (本体価格 18,000 円+税) B5 判 1016 ページ

本書は、2011年の初版からさらに、南西諸島や小笠原諸島に分布する種や分布域が限られている種、マツ属などを中心に240種の花粉が加わり、日本産植物212科873属1564種の花粉が掲載されている図鑑である。掲載されている植物種数の多さにも圧巻されるが、走査型電子顕微鏡で撮影された花粉写真の美しさにはさらに驚く。もちろん美しさだけでなく、種々の花粉形態学的特徴が分かりやすく、また光学顕微鏡で撮影された花粉写真や解説、検索表は、実際に花粉を同定するのに有用と思われる。さらに野生種の花粉だけでなく、植栽種・園芸種の花粉、花粉化石、花粉症原因植物花粉も掲載されており、索引も充実していることから、目的別に調べる場合にも役に立つ図鑑である。本書はこれまでの著者らの花粉研究の集大成といえるものであり、植物分類学・系統学や古環境学だけでなく、進化・生態学を研究する上でも重宝する図鑑と思われる。

(矢野 興一, 岡山理科大学生物地球学部)



森を食べる植物 腐生植物の知られざる世界

塚谷 裕一 / 著 岩波書店 / 発行 ISBN : 978-4-00-006059-2
 定価 : 2,160 円 (本体価格 2,000 円+税) 四六判 136 ページ

最近、変な植物ブームが来ているとひそかに思っていますが、変な植物の代表ともいえる腐生植物をわかりやすく紹介する日本語の本は、ほとんどなかったのではないのでしょうか。

本書は、エッセイのように軽快に読み進められますが、腐生植物について最新の知見も交えながらわかりやすく解説されています。いわば、腐生植物の入門書であり、解説書であり、エッセイでもある、そのような本です。

カラー写真も豊富で、珍稀で鮮やかな腐生植物のすがたは、好きな人にはうっとり、なじみのない人にとっては、植物の新たな魅力発見につながること間違いなしです。菌類の写真も豊富です。

さらに本学会会員にとって大変役立つことに、腐生植物の探しかたのポイントがまとめられています。花や果実の時期しか見られない、きわめて小さな植物たち。これらを探るのは至難の業ですが、見つけたときの喜びはひとしお。この本を通じて、まだ見ぬ新種やさらなる自生地が見つかることを願います。

(堤 千絵, 国立科学博物館植物研究部)



新版 形とくらしの雑草図鑑

岩瀬 徹・飯島 和子 / 著 全国農村教育協会 / 発行 ISBN : 978-4-88137-190-9

定価 : 2,700 円 (本体価格 2,500 円+税) A5 判 239 ページ

「雑草という名前の草はない。」と昭和天皇が言われたというエピソードをご存知だろうか? 本書は身近なところで普通に見られる「雑草」約 300 種を取り上げ、それぞれの名前とともにその意味や由来を美しいカラー写真とともに紹介している。APG 分類を採用しながら、旧科名も併記されていて、主な科の特徴も写真とともに説明されているため、エングラ体系に慣れている人も混乱することがないと思う。

それぞれの種の分類の鍵となる特徴について、鮮明な拡大写真で分かりやすく説明されているところは、本書で最も素晴らしいと感じる。もちろん、各部の用語の説明は図とともに巻末にまとめてあり、生活型についても紹介されている。家の庭や畑、公園や空き地などで見かけた草花を、「これはなんという草だろうか?」と思った時に野外や家で調べる上で、本書はとても頼もしい味方になってくれると思う。

(東 隆行, 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園)



植物研究会・同好会紹介

「愛媛植物研究会」

松井 宏光 (愛媛植物研究会会長)

【歴史】 1955年5月に、山本四郎氏、三好保徳氏、森川国康氏らが「松山植物趣味の会」を設立、その後1960年に「愛媛植物同好会」に、1975年に「愛媛植物研究会」と改めて現在に至っている。本会の会長は発足以来、山本四郎氏(今治明德短期大学名誉教授)であった。山本四郎氏(兵庫県丹南町出身)は1924年に愛媛県立水産試験所に赴任され、その後、植物学者の義父山本一氏のもとで本格的に植物調査を開始された。以来、2003年に98歳で他界されるまで、本会の会長(後に名誉会長)として会を指導された。

【組織】 本会の事務は愛媛県総合科学博物館専門学芸員2名(植物)が担当しており、そのため事務局所在は同博物館内となっている。現在の会員数は56名(県外4名)で長期的には会員数の漸減と高齢化が進行しているが、一方で若手の会員は微増している。本会ではHPを開設しており、活動計画や会誌を公表している。

【月報と月例会】 ほぼ毎月、会員向けに月報(2015年1月で375号)を発行し、野外観察会の前回報告と次回案内、植物に関する分布情報などを掲載している。月例会は例年、1月総会で年間活動を決め、2月研究発表会では毎年7~8題の研究成果や観察記録の報告がある。他の月は野外観察会を実施しているが、参加者は15名~25名ほどである。月例会にて愛媛県植物誌の発行に備えて愛媛県総合科学博物館の収蔵標本の再同定を行う場合もある。

【会誌『エヒメアヤマ』】会誌の名前は愛媛県の代表する植物にちなみ『エヒメアヤマ』とされ、1955年に会誌第1号が発行された。以来、1～2年間隔で発行しており、2015年8月には第46号（A4判、90ページ）を発行した。内容は主に県内におけるキノコ類や藻類、地衣類の分類、高等植物の分類・分布や植物群落に関する専門的なものが多い。また、地域の植物相（フロラ）に関するものもある。なお、第45号からは本会HPにて公開している。

【他県の植物研究会との交流】1987年から「ヒコピア会」（広島大学理学部）と交互に合同観察会を実施している（近年は日程上の都合で休止）。また1991年からは「土佐植物研究会」、「徳島県植物研究会」、「香川植物の会」と合同で「四国植物研究会」を組織し、毎年1回各県持ち回りで研究発表会と野外観察会を実施している。

【地域貢献】本県には高等植物の分類を扱う公的機関として愛媛県総合科学博物館があるが、その植物を専門とする専門学芸員2名は本会会員であることから、実質的には本会が愛媛県と松山市のRDB初版と改訂版を担当するなど県内の植物情報の収集・発信を行っている。

【課題と展望】近年、古くからの会員である石川早雄氏（主にシダ類が専門）、藤田幹雄氏（タケ・ササ類が専門）、得居修氏（スゲ類が専門）が他界されたが、現在の会員も高齢化が進む中で会員がもっている分類・分布情報をいかに後進に引き継ぐかが大きな課題となっている。そのためにも愛媛県植物誌の編纂に取りかかっている。また県内には会員や過去の研究者が作製した膨大な植物標本があるが、県内の博物館の収蔵庫は満杯状態であり、県内での収蔵施設の確保も懸案となっている。さらに、地域の植物相や外来植物などについて総合的に記録・調査する方法をどのように若手に引き継ぐかも今後の課題である。そうしながら、学生をはじめとする若手会員の勧誘や市民の方々への還元的な観察会の実施など、リニューアルさせる必要があるかもしれない。

【連絡先】事務局 川又明徳：akwmt8718@gmail.com

会長 松井宏光：hmatsui1115@gmail.com

【HP】<http://ehimebotanicalclub.web.fc2.com/>



野外観察会風景
2014年4月27日、大洲市長浜町



野外観察会風景
2014年5月25日、西予市桂川溪谷

編集室より

本号の編集作業中、私のいる筑波実験植物園でまたシヨクダイオオコンニャクが開花しました（3回目）。開花を見るのは何度でも面白いもので、死体のようにだと形容される臭いも、かいでいると時間の経過とともにココナッツのような、なにやらしい匂いもまざってきます。夜9時すぎごろから見られる、発熱した付属体からあがる湯気。こんな貴重な経験が何度でもできるのはうれしいものですが、無事に開花を終えるまで夢でうなされるのは1度で十分です。

ニュースレター担当幹事 堤千絵 (tsutsumi@kahaku.go.jp)



入会申込、住所変更、退会届、会費納入、購読申込などは下記へご連絡ください。

〒710-0046 岡山県倉敷市中央2-20-1

岡山大学 資源植物科学研究所

日本植物分類学会 池田 啓 (会計幹事)

Phone: 086-434-1238, Fax: 086-434-1249

E-mail: ike@okayama-u.ac.jp

会費： 一般会員 5,000円, 学生会員 3,000円, 団体会員 8,000円

郵便振替口座番号： 00120-9-41247

加入者名： 日本植物分類学会



平成 28 (2016) 年 8 月 20 日印刷

平成 28 (2016) 年 8 月 25 日発行

編集兼 茨城県つくば市天久保 4-1-1
発行人 国立科学博物館 植物研究部
堤 千絵

発行所 新潟市西区五十嵐2の町 8050
新潟大学教育学部
自然情報講座

日本植物分類学会

*ニュースレターに掲載された記事の著作権は日本植物分類学会が管理いたします。